

「話すこと・聞くこと」から「書くこと」「読むこと」へ

——井上ひさし「握手」考——

A Study on Inoue Hisashi's "Akushu"

河野 有 時

KONO Aritoki

場所は上野公園にある西洋料理店。その人は時間どおりに現われた。季節はやがて花から若葉へ託されるだろう。しばらくぶりに再会したルロイ修道士と「わたし」は、話し、聞き、そしてまた話す。「人と人とのつながりの温かさをしみじみと感じさせてくれる作品」⁽¹⁾とは言うものの、二人の会話はどこかぎこちない。それはそうであろう。ルロイ修道士は自らの病を悟られぬようにし、「わたし」はうすうす感づきながらも切り出せずにいるのだから。だが、そのぎこちなさは、この物語を「ちよつといい話」⁽²⁾に収斂させない揺らぎを生み出している。

本稿では、井上ひさし「握手」における、ルロイ修道士と「わたし」のやり取りを辿り、二人の言葉がその世界をどのように切り開いているかについて若干の考察を加えてみることにしたい。

一

ルロイ修道士と「わたし」のやり取りを「会話」や「対話」と呼ぶことに少しく躊躇するのは、これまで繰り返し指摘されてきたように、二人は発話を交わすだけでなく、「指のサイン」によって「言葉にならない心情や仲間どうしの信頼関係を繊細に表現している」⁽³⁾からである。この身体動作によって、ルロイ修道士と「わたし」が非言語コミュニケーションを行っていると見做してもよさそうであるが、それでは問題の所在がはっきりしないかもしれない。はやく松本修は「『握手』小論——精神の伝承の物語」⁽⁴⁾において、「この物語は、心と心の結びつきが、言語的な記号の共有によって支えられ、精神の継承がそうした記号の受け継ぎに支えられている」と指摘したが、「指のサイン」が「言語的な記号」で

あるという理解の基本線は沿うべきもののように思われる。織田保夫は、「指のサイン」の「言語との基本的な相違点」として「身体性と映像性」を挙げ、それによって「象徴作用が強くなる」^⑤と述べているが、「指のサイン」の一つである「右の人さし指に中指をからめて掲げ」るサインが、「指言葉」と称されていることに留意すれば、「指のサイン」は非音声の言語メッセージのようにも捉えられるのではないだろうか。

「わたし」が高校二年のときのクリスマスに無断で天使園を抜け出して東京に行ってしまった思い出話を聞いたルロイ修道士は、「両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつけ」たが「顔は笑って」いる。非言語コミュニケーションは、一般に言語によらないコミュニケーションのことであり、それは視線やしぐさ、服装や対人距離など多岐に及ぶが、ここでは表情の方がそれに当たるだろう。対して、「両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつけ」るサインは、「指言葉」として、言語メッセージ的な色合いを帯びている。だから、「緊張なんかしていませんよ」と言いながら顔を引きつらせているときと同じように、言語メッセージと非言語メッセージが矛盾している場合の通例として、表情が真実を語っていると受け取るわけだ。ルロイ修道士の笑顔は、いまでは行為の善悪より、そのことが心から懐かしく思われるということを告げている。この物語における「指のサイン」は、「癖」とは言うものの、思わず発信された自然なメッセージという枠に留まらず、「指」の「言葉」として、辞書的に了解し得ない意味を発していると考えるべきであろう。そして、その性質は「右の親指をぴんと立て」る「指言葉」に顕著に表われているように思われる。

いまでは「いいね！ボタン」でお馴染のこのサインは、ルロイ修道士と「わたし」のやり取りに繰り返し用いられているが、まず、それが二度続けて交わされる一齣を見てみよう。

「総理大臣のようなことを言っただけじゃないよ。だいたい、日本人を代表してものを言ったりするのは傲慢です。それに、日本人とかカナダ人とかアメリカ人といったようなものがあると信じてはなりません。一人一人の人間がいる、それだけのことですから。」

「わかりました。」

わたしは右の親指をぴんと立てた。これもルロイ修道士の癖で、彼は、「わかった。」「よし。」「最高だ。」と言う代わりに、右の親指をぴんと立てる。そのことも思い出したのだ。

「おいしいですね、このオムレツは。」

ルロイ修道士も右の親指を立てた。わたしは、はてなと心の中で首をかしげた。おいしいと言うわりには、ルロイ修道士に食欲がない。ラグビーのボールを押し潰したようなかっこうのプレーンオムレツは、空気を入れればそのままグラウンドに持ち出せそうである。ルロイ修道士

士はナイフとフォークを動かしているだけで、オムレツをちつとも口へ運んではいけないのだ。

ルロイ修道士の指がたたき潰された経緯と重ね合わせながら、

「日本人は先生に対して、ずいぶんひどいことをしましたね。交換船の中止にしても国際法無視ですし、木づちで指をたたき潰すに至っては、もうなんて言っていないか。申し訳ありません。」

という私の発言を受けて、「右の人さし指をぴんと立て」ながらルロイ修道士が話し出す場面である。

ここで「わたし」とルロイ修道士は、短時間のうちに右の親指を立てる動作を取り交わす。それが、以前からのルロイ修道士の「癖」であるという二人共通の認識も相俟って、しばらくぶりの再会にも変わることもない両者の結びつきが映し出されているのである。「信頼関係を繊細に表現している」とも評される所以であろう。そして、そのサインの意味するところは、「わかりました」という同意の発語を補完するものであり、続いては、「おいしいですね」という賛辞を強調するものと見てよさそうだ。

ところが、当のルロイ修道士はオムレツを少しも口にしない。ルロイ修道士にしてみれば、自分の健康状態を心配させないための強意の「指のサイン」であったのかもしれない。また、それによる念押しは、話題の取捨というレベルでは、小休止をはさみ、話を転じる前置きという役割も果たしているだろう。それでも、「指のサイン」が、かえってルロイ修道士の様子と「おいしいですね」という発語のずれを「わたし」に意識させてしまったことは間違いないところだ。ぴんと立てられた親指は自動的に「よし」「最高だ」と置き換わる発語の付属物ではなく、それ自体が「指言葉」として、特別な事情があることを言外に伝えたと言ってもいいだろう。

傍から見れば、ブレンオムレツをはさんで向かい合った二人が、右の親指を交互に立てながら話している和やかな情景ではあるが、ルロイ修道士はブレンオムレツの味を褒めることで話題が自身の体調に及ぶことを避けようとし、「わたし」は不審に思いながらも確かめることはできずにいるのである。そして、立てられた右の親指がその均衡を保っているのだ。

では、その直前、「総理大臣のようなことを言っていないけませんよ」というルロイ修道士の忠告を受けたときの「わたし」の同じサインはどうだったのだろう。こちらはとくに他意のない同意だったのだろうか。

二

「一人一人の人間がいる、それだけのことです」というルロイ修道士の言葉は、教材としての「握手」において重い意味をもつ。「日本人とかカナダ人とかアメリカ人といったようなものがあると信じてはなりません。一人一人の人間がいる、それだけのことですから」という一節に中学生が触れるというそれだけでも、「握手」が長く教科書に採られている理由として十分ではないかとさえ思われる。だが、ここではあえてその一節に不適切な荷重をかけてみよう。「一人一人の人間がいる、それだけのこと」であるなら、ルロイ修道士の指をたたき潰した監督官も一人の人間としてそれを行ったのだろうか⁽⁶⁾。きつとそうではないだろう。ここでは、「わたし」が言う「日本人」としての行為だったと考えておくことにしよう。抑留所における虐待を交換船の中止と同様に、「国際法無視」という観点から捉えるとき、今日とは異なり、国際法の主体は原則的に国家であるからだ。渡部裕太は「〈国家〉を解体し、結びつく〈家族〉——井上ひさし『握手』における作品の虚構性への着目による教材解釈の更新」⁽⁷⁾において、「〈国家〉の問題と戦争の問題とをひとまとめに論じていこうとすると、畢竟、敗戦国―戦勝国という二項図式が浮かび上がってしまう」と言う。「握手」を「〈国家〉を乗り越えるコミュニティとしての非血縁的〈家族〉関係が強調された物語」と見てのことであるが、「〈国家〉の問題と戦争の問題」は、一方で個人がそれらとどのような関係性にあったのかという問いかけをもちたのではない。

だが、いまさら言うまでもないことだが、戦争における国家と個人の問題は複雑に入り組んでいる。「戦勝国の白人であるにもかかわらず敗戦国の子供のために」と書かれてはいるが、「戦勝」「敗戦」というほかに、「加害」「被害」という観点があるからだ。ルロイ修道士は、「戦勝国の白人」で、指をたたき潰された被害者であった。その爪痕を目前にした「わたし」が加害者たる日本国の構成員として、「申し訳ありません」という言葉を選んだとしても、決して過ぎた真似ではないだろう。一方で、「敗戦国の子供」として、児童養護施設で過ごすことになった園児たちは被害者でもあった。もちろん全国民を巻き込んだ戦争においては、巻き込まれたすべての国民が戦争犠牲者であるとは言い得る。しかしながら、ここで見過ごされてはならないのは、そのとき園児たちが「子供」だったということだ。戦争責任については、戦争指導者やそれに加担した国民の問題として、あるいは、戦争にかかわりようもなかった戦後世代の問題として議論されることが多いが、戦時下にあつて、まだ自立した個人とは言いが難かった「子供」たちが背負い続けた犠牲と責任は、最も重層的な悲劇と認識されなければならない。「わたし」の「ずいぶんひどいこと」という「日本人」への非難は、園児たちも戦争犠牲者であるということとまったく無縁ではないだろう。

また、被害者に対する補償という点からすれば、本来は「敗戦国」がすべきところを、「戦勝国の白人」で被害者でもあったルロイ修道士たちが負ったのである。ルロイ修道士に向き合う「わたし」には、被害や加害をめぐる実感が幾重にも折り重なっていたに違いない。渡部は「国籍と

人間性の連関を切り離せ、というルロイ修道士の教えに対し、『わたし』は自身の越境的な思考のプロセスを実行してみせることで応えている」つまり、「日本人的思考の枠組みでの失語体験を、英語的な発話によって覆い被せ、更新しようとしてみせている」と述べるが、「一人一人の人間がいる、それだけのことです」とは、ルロイという人格によってこそ発せられるものであつて、その場でルロイ修道士の言いに「応え」、即座に自らの発想を「更新」するのは、いかに「わたし」といへども容易なことではなかったのではないか。ルロイ修道士の言うところを理解し、受け止め、「わかりました」と言つてはみても、あの戦争に思いをいたすとき「日本人」と「いったようなものがある」と信じてはなりません」という忠告に、全円的に同意することは難しかったであらう。さりとて、ルロイその人を前にして、この場が反論や弁明には相応しいはずはなく、「わたし」は「わかりました」と言つて右の親指を立てるよりなかったのだ。用いられた「右の親指をびんと立て」るサインも、ただ「わかりました」を補完するものではなかった。「わたし」は、このサインによつて間を取つたのだが、そのとき、この「指言葉」は「敗戦国の子供」が抱え込んできた戦後を語り出すように思われる。

三

「仕事はうまくいっていますか。」

「まあまあといったところです。」

「よろしい。」

ルロイ修道士は右の親指を立てた。

「仕事があまくいかないときは、この言葉を思い出してください。『困難は分割せよ。』あせつてはなりません。問題を細かく割つて、一つ一つ地道に片づけていくのです。ルロイのこの言葉を忘れないでください。」

ルロイ修道士と「わたし」の間に取引交わされる三度目の「右の親指」である。ルロイ修道士が「遺言」と思しき「この言葉」を残す場面ではあるが、発話の一つ一つはありふれたもののように見える。ここでは、立てられた右の親指も「よろしい」と支障なく置き換えられそうだ。しかし、会話の流れが合っているように感じられない。「仕事はうまくいっていますか」という問いへの答えとしての、「まあまあといったところですよ」は、通常、「順調である」とか「とくに問題があるわけではない」という意味だろう。であるからこそ、ルロイ修道士は「よろしい」と

言ったのである。ところが、一転して、「仕事がうまくいかないときは」と続ける。目の前で、仕事はまずまず順調だと言った直後の「わたし」に「仕事がうまくいかないときは」と切り出すのは、やはりどこか奇妙に思われる。

そのためであろうか、光村図書の『中学校国語 学習指導書 3上』では、「わたし」が『まあまあといったところです。』と答え、ルロイ修道士もそれを喜んでいるにもかかわらず、『仕事gがうまくいかないときは、……』と言ったことから、あらかじめ言葉を用意していたことがわかる」と説明されている。たしかに、あらかじめ用意していた言葉ではあったろう。しかし、指導書がこれと「一人一人の人間がいる」の箇所を対比的に捉えていることについてはやや図式化が過ぎるのではないかと思われる。

傲慢になるなという戒めと、人種を超えた一人一人の人間がいるのだという教えには、ルロイ修道士の信条や生き方が色濃く投影されている。しかも、それはこの再会のためにあらかじめ用意されていたもの（P24 L2「困難は分割せよ。」とは異なり、状況の中で自然に出てきたものであり、今の「わたし」の至らなさを戒め諭すものであった。だからこそ、「わたし」は素直に「わかりました。」と答え、右の親指をぴんと立ててみせたのである。

「一人一人の人間がいるのだという教え」が「わたし」の「至らなさを戒め諭すもの」であることを十分承知していても、「素直に『わかりました。』と答え」られる類いのものでないことは既に述べたとおりであるが、「あらかじめ用意されていたもの」と「状況の中で自然に出てきたもの」とでは、「状況の中で自然に出てきたもの」の方が重きをなすのだろうか。「状況の中で自然に出てきたもの」は「信条」であり、「あらかじめ用意されていたもの」は「処世訓」だとして、「二つは対照的な意味を持つ」という川嶋秀之のような見方さえなくはないが⁽⁸⁾、「あらかじめ用意されていたもの」は、「どうしても伝えたいと考えていたことば」であったという青嶋康文の指摘は重んじられなければならないように思われる⁽⁹⁾。川嶋は「あらかじめ用意していた言葉」は、「東京で会った教え子の誰にも言った言葉ということになる。誰にも伝えようとした言葉は、勿論大事な内容を持つ言葉であるが、反面誰にも妥当する一般的な言葉でもある」とも言うが、「会った教え子」みなに、「困難は分割せよ」とルロイ修道士が伝えたとは考えにくい。それこそ「一人一人の人間がいる」という「信条」に反するからである。

再会の握手を交わすすぐ「熱心」に、「かつての収容児童たちの近況を」語り始めるルロイ修道士の人となりは、過去の献身的な姿も重ね合わせて紡ぎ出されていくが、一人一人と「さよならを言う」場にあつて、その人はそれぞれのための言葉を一人一人にあらかじめ用意してきたと考えるほうが描かれた教育者としての人物像に適っているのではないか。つまり、ルロイ修道士は「困難は分割せよ。」あせってはなりません。問

題を細かく割って、一つ一つ地道に片づけていくのです」という言葉を「わたし」のために選んできたのである。別言すれば、「まあまあといったところ」と「わたし」が認識していたとしても、恩師は、いざれ分割の必要なくらい大きな困難に直面するであろうことを案じていたのであり、その際、対応にあせって、一つ一つ地道に片づけることが難しくなるのではないかと案じていたのである。

このときルロイ修道士が「よろしい」と言うだけでなく、「右の親指を立てた」のは、これまでこのサインが、「わかった」「よし」「最高だ」に置き換えられたり、発語を補完したり、強調したりするものではなかったのと同様に、そう言って立てられた右の親指の向こうに、ルロイ修道士を心配させる「わたし」の状況が恩師には見えていたからなのだろう。しかし、ルロイ修道士は、サインによってその状況については立ち入らないことも示し、来るべき困難への対処法を伝えたのである。自分がどれほど心配していたか、いつか分かるだろうから「忘れないでください」と言つて。

四

上野駅の中央改札口でいよいよ恩師と別れようとするとき「わたし」は、

「ルロイ先生、死ぬのは怖くありませんか。わたしは怖くてしかたがありませんが。」

と言う。この「わたし」の発言に対して指導書は「率直に真情を吐露する『わたし』は、ルロイ修道士を永遠の師として敬愛しているのである」⁽¹⁰⁾と述べているが、「率直」であるにしても、「わたしは怖くてしかたがありません」はいささか唐突であろう。「握手」においては、いまの「わたし」の人柄はほとんど具体的に語られないものの、仕事も「まあまあといったところ」であるからというわけではないが、「死」を意識して、それが「怖くてしかたが」ないというような人物として描かれてはいない。それだけに、「わたし」の突然の物言いは、これからくる大きな困難への予兆として響くように思われる。別れの改札口に立ち戻れば、いよいよ去ろうとしている先生に、病人なのではないか、この世のいとまごいなのではないか、これはお別れの儀式なのかということ「思い切って」問いかけようするこの場面で、「わたし」は先生の体調への不安に引きずられたのか、自身の「怖くてしかたが」ないという危惧を口にしてしまっている。続く、

「天国へ行くのですから、そう怖くはありませんよ。」

「天国か。本当に天国がありますか。」

「あると信じるほうが楽しいでしょうが。死ねば、何もなただむやみに寂しいところへ行くと思うよりも、にぎやかな天国へ行くと思うほうがよほど楽しい。そのために、この何十年間、神様を信じてきたのです。」

というやり取りでは、しばしばルロイ修道士の信仰心が問題にされてきた。はやく、佐藤洋一は「神に使える聖職者の答えとしては不自然、しかし、それが逆に率直な人間味として伝わる」⁽¹¹⁾と指摘し、また、織田保夫も「ここに至って、おや、と思う」と述べて、「これは何とも〈現実的な発言ではないか〉と評している」⁽¹²⁾。「この聖職者はすべての根源を神に置いていない」、しかし、「わたし」は「現実的な功利性とそれゆえの人間性を見て感動した」と見ての立論であるが、ここにルロイ修道士の「人間味」「人間性」が現われていることに異論はないものの、ルロイが何に對して、このように答えたのかについては再考の余地があるだろう。

川嶋秀之は、「強い信仰心を持っていたと思われたルロイ修道士の余り熱心でない信仰心をさらけ出させたのは、『わたし』の死に関する唐突な質問であった」⁽¹³⁾とするが、先生は、「死ぬのは怖くありませんか」という質問に答えたのではなく、かつての園児だった「わたし」の「怖くてしかたが」ないという不安に答えたのではないか⁽¹⁴⁾。「わたし」が、すでに自分の病状を察していそうだということは、「かつて、わたしたちがいたずらを見つけたときにしたように、ルロイ修道士は少し赤くなつて頭をかい」ていることから知れよう。それでも、先生は、それよりも「わたしは怖くてしかたがありません」という告白に答えたのである。もとより先生は、これから「わたし」が困難に直面すると予期しているのだから、いっそう不安を募らせたかのように「本当に天国がありますか」と続ける「わたし」には、「あると信じるほうが楽しいでしょうが」「何十年間、神様を信じてきたのです」と、あせらず地道に歩むことを暗に諭したと見るべきだろう。

「わたし」は、「わかりましたと答える代わりに」、また右の親指を立て、そして、最後の握手をする。「握手」におけるこのサインがどのような場面で用いられていたかについてはすでに述べてきたところであるが、ここでもそれが「わかりました」の「代わり」になっているとは言い難い。指導書は、「右の親指を立てる指言葉は、『わかりました。』だけでなく、『よし』『最高だ。』という意味ももっていることに注目させたい」⁽¹⁵⁾と言うが、「わたし」は先生の言うところを理解したつもりで、先生がこれからくる「うまくいかないとき」に心を痛めていることまで思いが至らなかったのではないだろうか。「握手」については、「わたし」の思いが先生に届かなかつたと解するむきもあるようだが⁽¹⁶⁾、恩師の思いを聞き届けられなかったのは、むしろ「わたし」の方だったのかもしれない。より正確に言えば、このとき、そして、葬式のときにもまだわからなかつ

ただろう。ルロイ先生がああとき何を伝えたかったのか、それを「わたし」が知るのは、困難に行き当たってからだ。「わたし」が忠告通りに困難を分割して解決できたかは知る由もないことだが、「まもなく一周忌である」として、語りの現在が一年後に設定されているのは、その一年が上野でのルロイ先生とのやり取りを問い直すための時間になったということなのだ。「握手」は、「精神の伝承の物語」と言われるが、これもより厳密に言えば、「精神の伝承」に「わたし」が気づくまでの物語なのである。

ルロイ修道士の葬式で、「わたしは知らぬ間に、両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつけていた」と、物語は語りおさめられる。「そのことを聞いたとき」であるから、「わたし」の怒りは、病魔や冷酷な運命に向けられていたに違いない。あるいは、病身を顧みずかつての園児を訪ね歩いた先生の行動や、病気であることを隠したことを難じていたのかもしれない。だが、「まもなく一周忌」のいまから見れば、先生の胸中をはかりかねた自分に「おまえは悪い子だ」と言っているようにも見える。先生と「わたし」の間柄が、握手という身体接触が表すように信頼関係に支えられたものであることは言うまでもないが、上野で立てられた右の親指をはさんで向き合ったときの二人のやり取りには、ところどころで意味のずれが生じていた。しかし、そのずれが齎せた意味の遅れが、「わたし」を物語ることにつながると言えるだろう。語られたルロイ先生と「わたし」のやり取りは、読まれることで繰り返され、その読みにもずれや遅れが生じるならば、物語は多様な意味を産出し続けて、ルロイその人は生き続けることになるのである。

井上ひさしの「握手」は一九九三年度版の教科書に初めて採録されたが、その五年後、平成一〇年に新しい中学校学習指導要領が告示された。新学習指導要領は、「伝え合う力」を鍵語に、「表現」「理解」「言語事項」であった国語科の領域を、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」と「言語事項」に改めるものであったことはよく知られるとおりである。改正の背景には、「文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方」があつて、「互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成する」⁽¹⁷⁾ということが求められたのだ。「文学的な文章」は、「情景や心情の描かれているところを読み味わ」⁽¹⁸⁾うものと見做されていたのである。それゆえに、「話すこと・聞くこと」は「表現」「理解」から切り離されて、独立して設けられることになったのであり、ともすると「文学的な文章」と対峙することになった。その「話すこと・聞くこと」においては、言語活動例として「説明や発表」「対話や討論」が挙げられたように、意味の伝達と了解は前提となっていただろう。そして、意味のずれや遅れなどは問題視されたに違いない。だが、「握手」は、その場で正確に伝達し了解することが、コミュニケーションの豊かさのすべてではないことを語り出している。誤解のないようにあえて要らぬ付言をすれば、「話すこと・聞くこと」より「文学的な文章」が優れているというわけではない。学習のために設定された様々な領域は相互に関連し合っているということなのだ。「話すこと・聞くこと」と「書くこと」「読む

こと」、また、「文学的な文章」を読むことと「論理的な文章」を読むこととの差異は、設定、あるいは想定されたコミュニケーション・モデルのあり方の違いでもあろう。それらが相互に通行することによって、学習者はコミュニケーション・モデルに意識的となるのではないか。プレゼンテーション能力とは区別して考えなければならぬコミュニケーション能力とは、コミュニケーション・モデルに意識的となり、その多くのバリエーションも知ったうえで、コミュニケーション・モデル自体を設定しなおす、あるいは、想定しなおすことができる力のように思われる。「文学的な文章」について言えば、発信者と受信者を配したコミュニケーション・モデルは、老婆が語り下人が聞くとときや、虎と化した故人の声を叢中から聞くととき、また、先生から届いた遺書を読むときなどのように捉え直されるのだろうか。改札口から去りゆくルロイ修道士の後ろ姿はそんなことも問いかける。

〈付記〉「握手」の引用は、『国語 3』（平二・二、光村図書出版）によった。引用に際してルビは省略した。

注

- (1) 『中学校国語 学習指導書 3上』（平一八・二、光村図書出版）
- (2) 松本修は「握手」における語りと主題（『Group Bricolage 紀要』(No.22 二〇〇四・一二）において、「ちょっといい話としてルロイ修道士のやさしさを読みとり、道徳的な心の教育に短絡させられてしまうことをおそれる」と述べている。
- (3) は(1)に同じ。
- (4) 『Group Bricolage 紀要』(No.16 一九九八・一二)
- (5) 「握手」の構造（田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校編3年』二〇〇一・六、教育出版）
- (6) 「文学と教育」（二一六号、二〇一二・八）掲載の「座談会 井上ひさし『ナイン』「握手」をめぐる」において、井筒満は「あの監督官は確かに日本人だった。だけど、それがすべてだとは見ていない。たとえ日本人にやられたとしても、その日本人の中に一人一人の人間がいるんだと、そういうふうにして一人一人を見ていくんだということを口だけじゃなくて実践してくれているわけです」と述べている。また、『わたし』は、『わかりました』と言ってるけど、決して日本人に戦争責任がなかったとか、そういうことを自分の問題として考えなくていいんだとか、そういう意味での『わかりました』ではなくて、本当にそういうことを自分自身が一人一人の問題として考える姿勢というのをどこか横において、何か傍観者のあるいは右代表みたいな形でやる。それでは、本当の責任追及というか、あるいはそれを踏まえて一人一人が未来を作っていくということにはならないんだということを何かルロイ修道士の言葉ではつと気がつかれる」と指摘している。
- (7) 『日文教 国語教育』（第四四号、二〇一七・一一）
- (8) 「井上ひさし『握手』の言語表現」（『茨城大学教育学部紀要（教育総合）増刊号』（二〇一四・一〇） 引用に際して、横書き原文の記号・符号を縦書き用に改めた。

- (9) 「喪失と継承——井上ひさし『握手』を読む」(田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校編3年』二〇〇一・六、教育出版) また、青嶋は「ルロイ修道士は、きつとこのことが生きた教訓となる日がくると確信していたのかもしれない」と述べている。よるべき見解であろう。
- (10) は(1)に同じ。『中学校国語3 教師用指導書 教材研究編』(学校図書)では、「宗教者に対する質問としては普通なら失礼にあたる可能性が高い。逆に言えば、それだけ二人の間には親しい関係が確立されていることが現れている」と解説している。
- (11) 「物語・小説の言語技術教育論——井上ひさし『握手』を中心に」(『愛知教育大学研究報告(教育科学編)』第四四輯、一九九五・二) 引用に際して、横書き原文の記号・符号を縦書き用に改めた。
- (12) は(5)に同じ。
- (13) は(8)に同じ。
- (14) 渥見秀夫は「井上ひさし『ナイン』の中の「ナイン」と「握手」」(『愛媛国文と教育』第三七号、平一六・一二)において、「両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつけていた」ことには「何らかの怒りの感情が、我知らず滾っていたから」であるとして、「相手を思いやる言葉にして表現することができず、最後には死の恐怖と天国の有無という自分の関心だけをぶつけてしまい(「ナイン」の「弱虫」常雄も「死ぬということ」を一番こわがっている子)だった——、「かつて」のように自分を思いやって『やさし』く答えてくれる相手に、つい『かつて』のように幼く応えてしまっただけの自分」への怒りもあつたと指摘している。
- (15) は(1)に同じ。
- (16) 前掲(8)において、川嶋は葬式場において「わたし」が「両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつけ」る指言葉に込めた思いを、「ルロイ先生、最初の出会いの時あなたがあんなにも強く手を握ったことの意味がわかりました。でも、最後の上野駅での別れの時わたしが強く握った意味は、『痛いですよ。』と顔をしかめたのですから、わたしの思いは届かなかったのでしょうか。わたしもルロイ先生の握手の意味を理解するためには時間が掛かりました。先生はあの後すぐに亡くなられたので、わたしが握手に込めた思いを知ってもらう機会が永遠に失われました。残念でなりません。」としている。
- (17) 教育課程審議会答申(平一〇・七・二九)
- (18) 中学校学習指導要領(平成・三)

(この・ありとき／京都ノートルダム女子大学・国際言語文化学部・教授)

